

は じ め に

宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター（CMP S）は、これまで日光市国際交流協会による交流事業「食から世界を考える」の開催に協力してきました。2015年度からは、国際学部の外国人留学生、および留学経験日本人学生によって、栃木県大学・地域連携プロジェクト支援事業「外国人留学生と留学経験から見る日光の観光開発プラン『世界遺産+1』」を実施し、CMP Sと日光市が協力しました。2016年度は、宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センターと日光市国際交流協会による主催事業として、「国際交流都市日光の再発見！－学生が考える日光のもう一つの地域発展プラン－」（通称日光プロジェクト）を日光（東照宮）エリアおよび奥日光（中禅寺湖）エリアで実施しました。

本プロジェクトは、「国際交流都市日光の魅力」を①観光開発、②国際交流、③地域づくり、の3つの視点から再発見し、留学生と海外経験のある日本人学生の気づきによるフィールドワーク・シンポジウムを行い、留学生などの参加者が海外へSNSなどを通じて日光の情報について発信し、日光市の観光政策へ政策提言することを目的にしています。

続いて、2017年度は「国際交流都市日光の再発見－『まちづくりと観光開発』を留学生と考える」をテーマに日光（東照宮）エリアおよび栗山・湯西川エリアで、2018年度は「国際交流都市日光の再発見－『足尾の歴史を活かした観光地づくり』を国際的視野から考える」をテーマに足尾エリアで、2019年度は「国際交流都市日光の再発見－『観光モデルを留学生と考える』プロジェクト」をテーマに日光市エリアおよび奥日光エリアで開催し、ここまでは毎年それぞれシンポジウム、フィールドワークを行ってきました。しかし、20年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響で留学生も来日できなくなり、フィールドワークを取り止め、シンポジウム「国際交流都市日光の再発見－日光のインバウンドについて留学生と考える」のみを開催しました。

そして、2021年度は宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター／日光市国際交流協会主催事業「国際交流都市日光の再発見－奥日光の自然を活かした観光地づくりを留学生と考える」プロジェクトを継続するコロナ感染禍の下、11月13日に奥日光エリアを中禅寺湖、戦場ヶ原、湯ノ湖の3グループに分かれて、国内在住の留学生などを中心に人数を減少してフィールドワークを実施し、12月5日にシンポジウムをZoomによるオンライン形式で開催しました。今回のシンポジウムは、日光の豊かな自然を守りつつ、観光地としてより魅力のある場所へとするにはどうすれば良いのかをフィールドワークを通して考えることを目的にしています。昨年から続くコロナ禍でアウトドア需要が高まり、観光に関しても体験型・屋外・自然に注目が高まっている中でも、現地ガイドによるネイチャーツアーは環境・自然学習にもなり、従来の観光とは一味違った、新しい観光になります。今回のフィールドワークでは、その体験型観光を経験し、豊かな自然や環境問題について学び、それを守る（活かす）観光地づくりを国際的な視野から考え、シンポジウムではその提言を行いました。

本報告書は、21年度のシンポジウムの内容をまとめたものです。本シンポジウムでは、これまでのプロジェクトの経験を基礎に、『奥日光の自然を活かした観光地づくりを留学生と考える』を国際的視野から留学生と共に意見交換を行いました。参加者は、宇都宮大学学生、卒業生、大学関係者、日光市関係者などでした。プログラムの内容は、第1部の講話は、大久保達弘氏（宇都宮大学農学部教授）、森田孝道氏（日光自然ガイド協議会／日光自然博物館自然解説員）、Bernadett Kiss氏（CMP S研究員／スウェーデン Lund 大学国際産業環境経済研究所講師）、Carl Salk氏（CMP S研究員／スウェーデン農業科学大学 研究員）の4名にお話をいただき、第2部は留学生によるプレゼンテーション「国際交流都市日光の再発見！」をテーマに、3グループの留学生から報告があり、日光市観光経済部観光課長の伊東剛氏のコメントの後、意見交換を行いました。

最後に、本プロジェクトおよび本シンポジウムで世話になりました、日光市国際交流協会の会員の皆さま、参加してくれた学生の皆さん、テープ起こしをいただいた宇都宮大学国際学部学生の澤田琴乃さん、石原宇法さんなど関係者の方々に心からお礼を申し上げます。

2022年3月

宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター
センター員（グローバル担当）
国際学部教授 重田 康 博